

会 議 結 果 報 告 書

令和 8 年 8 月 13 日

会議の名称	令和 8 年度第 1 回舞鶴市第 6 期地域福祉計画策定懇話会	
種別	☐ 附 属 機 関 ☒ 懇 話 会 等	
開催日時	令和 8 年 7 月 13 日（月）13 時 30 分～	
開催場所	舞鶴市役所 別館 4 階 413 会議室	
出席者	(委員) 畑本会長、川手副会長、加藤委員、熊取谷委員、 木谷委員、材木委員、仙田委員、上西委員 (事務局) 日紫喜福祉部長、他 10 名	
議題	1. 開会挨拶 2. 委員及び事務局紹介 3. 会長、副会長選出 4. 地域福祉計画について報告 5. 地域福祉計画について意見交換	
公開の区分	☒ 公 開	
	☐ 部分公開	[理由]
傍聴者数	0 名	
審議結果 及び 主な意見等	別紙議事録のとおり	
会議録の作成様式	☐ 詳 細 ☒ 要 約	
備考		

担当課	舞鶴市福祉部福祉企画課 TEL 0773-66-1011
-----	---------------------------------

第1回舞鶴市第6期地域福祉計画策定懇話会議事録

日 時:令和8年7月13日(月)13:30～15:10

場 所:舞鶴市役所 別館4階 413会議室

出 席:(委員)

畑本会長、川手副会長、加藤委員、熊取谷委員、木谷委員、材木委員、仙田委員、上西委員
(事務局)

福祉部 :日紫喜部長、濱上次長

福祉企画課 :瀬野課長、田中地域福祉係長、藤本企画係長、新宮主査

高齢者支援課 :半林課長、堂田主幹

障害福祉・国民年金課:織田課長

健康・こども部:瀬野こどもまんなか室長

子育て応援課 :佐々木子育て支援係長

欠 席:迫田委員

傍聴人:0人

会議内容:

1. 開会挨拶
2. 委員及び事務局紹介
3. 会長、副会長選出
4. 地域福祉計画について報告
5. 地域福祉計画について意見交換

1. 開会挨拶

2. 委員及び事務局紹介

3. 会長、副会長選出

(事務局)

・舞鶴市第6期地域福祉計画策定懇話会に関する要綱の規定に基づき、本懇話会の会長を互選により 選出させていただきたい。立候補や推薦はあるか。

【発言なし】

(事務局)

特にないようなので、事務局に一任いただくということでよいか。

【異議なし】

(事務局)

・では、会長については、畑本委員にお願いしたい。

【畑本委員了承】

(事務局)

・続いて、副会長を選出する。立候補、推薦はあるか。

(畑本会長)

・副会長については、社会福祉協議会の川手委員を推薦する。

ご承知の通り、地域福祉計画を策定し、今後それを地域で実践していくためには、住民に最も近いところで日々活動されている社会福祉協議会との連携が欠かせない。

川手委員には、現場の詳しい視点から私を支えていただき、この計画を本当に役立つものにするためのパートナーになっていただきたい。現在ご不在だが、事務局、いかがか。

(事務局)

・川手委員におかれては、不在の間については、会議出席の委員に一任する旨、お聞きしていることを報告する。

(畑本会長)

・あらためて賛同いただくようお願いしたい。

【異議なし】

(畑本会長)

・今期の改定においては、重層的支援体制のさらなる深化に加え、ひきこもりや8050問題といった具体的な課題への対応、ボランティア等の担い手確保など、実行性のある計画策定に取り組みたい。

4. 地域福祉計画について報告

・資料に基づき事務局説明

5. 地域福祉計画について意見交換

(委員)

・災害時要援護者対策事業の計画作成率が下がっているのはなぜか。

(事務局)

・自力で避難が難しい方について届け出をもらい自治会等に共有している。届け出される方は要介護、障害のある方。年々、死亡等により対象者は減少しているが、新規に対象になる方について、民生委員と協力して策定しているが計画策定までつながっていないのが要因だと分析している。

(会長)

・欠員地区が増えたからか。欠員地区が解消すれば作成率が上がっていくと考えられるか。

(事務局)

・解消していくかもしれない。

(委員)

・前年度まで民生委員をしていた。新規に呼びかけをしても作成を拒否される。民生委員の有無に関わらず、登録したい方がいないという感覚で、委員数によるものではないと思う。

(会長)

・欠員だけが原因だけでないということであれば、原因究明が必要。震災から時間が経ち、意識が安心に向いている。情報を取ることに對し、事件等もあり、複合的な問題だと思う。いろいろ手を打てると思うので、分析して対応してほしい。

(会長)

・いくつか確認したい。まず、異なる分野の新たな連携について、庁内連携、庁外連携と分けて考えていくべき。その上で、どちらがうまくいかないか。現状は。

・福祉サービスの利用しやすさについては、原因があるので分析が必要。民生委員減少によるリーチの減少か、そもそも社会の状況として行政、福祉事業への信頼が下がったのか。

・民生委員の担い手不足の課題は舞鶴市だけでない。他自治体の情報を集めることは重要。1つの原因によって、こうしたから数が増えるというものではない。ハードルが上がっていることに對し下げていくこと、役割を明確化することで引き受けやすいという声がある。現役世代の民生委員は研修等に夜しか参加できないなど、そういったことへの対応も含めて検討が必要。

・市民参加について、数字を見る限り頑張っていると思うので、引き続きお願いしたい。

・重層的支援体制整備事業について、国が梯子を外したということもあると思うが、舞鶴市としては包括化推進員や庁内包括マネージャーが置かれており、期待できる。あとはどのように実効性が担保されているか言及があったほうが検討しやすい。

(事務局)

・1点目の質問について、5つ目の重層的支援体制整備事業へのコメントとも重なってくるが、多機関協働の取組を進める中で、包括化推進員や庁内包括マネージャーを配置し、関係機関巡回訪問による意見交換やヒアリングを行っている。相談機関の方からいただいた相談は推進員が課題の解きほぐし、整理を行い対応している。

・民生委員の課題については、個別支援計画の割合と重なるところ。民生委員の活動に伴うことだけではなくて、計画の大切さであるとか、そういったPRが必要かと思う。民生委員の欠員は危機的で、民生児童委員連盟でも欠員対策部会を立ち上げ、検討を進めている。民生委員ではないが、他の会議でも現役世代が参加しやすい工夫をしているところで、この視点を広げたい。

(事務局)

・連携について、庁内は生活困窮中心に連携をしている。支援調整会議には収納推進課にも参加してもらっており、滞納情報をいち早くキャッチしている。そういう点では他より連携できる体制が整っているかと思う。外部機関からの相談が直接入ってくる仕組みもある。庁外連携においては、重層的支援体制整備事業で「ネットワーク会議」を設けており、分野を超えた参加の中で状況報告をするなどしている。多機関協働も社協を中心に実施。各事業所へのヒアリングにて意見聴取を行い、課題、問題点を伺っている。これを新たな地域福祉計画にどのように盛り込んで行くのか が課題。

・民生委員については、当人たちも危機感を持って取り組んでおられる。抜本的な改革に京都府も協力いただき、また3年後の改選時にどのように変えていけるかが勝負。

・このほか、こども分野については令和8年度にワンストップとして相談窓口等を集約した。

(委員)

・民生委員という存在を知らない住民がおり、アピールが十分でないという問題意識がある。

・目指す地域像については賛成。遠方の家族より、近所だと住民にも言っている。

(委員)

・個別支援計画の作成について、舞鶴市は民生委員と取り組んでいるが、市町村によっては社協と作成するなどいろいろ。府(地域福祉推進課)としてもヒアリングを実施するので、参考にしていただければと思う。

・精神保健福祉士について、医療中断の方等を医療につなげる相談が多い。福祉課、保健分野との連携がなかなかとれないと感じる。妊産婦関係など、どのように連携しているか。保健所でも心の推進員ボランティアを養成しているが、舞鶴市のボランティアは登録者が増えていてすごい。なり手がいない。退職者がやってくれる時代から、定年後も働き続ける時代になり、担い手が減っている。共助の部分、ボランティアサロンを今後どう運営していくか。社協と協働か、市と協働か。

・精神障害者家族の会、舞鶴市だけなくなってしまった。再建を考えたいと思っている。

(委員)

・生活支援相談センターでは、生活困窮だけではなく女性問題、消費者トラブル等様々な相談支援を行っており、対象に垣根がない。生活困窮に限って言っても、背景は様々。センター自体に武器となる制度や権限があるわけではなく、日々悩みながら対応している。自助、共助、公助の支え合いの関係が必要と

あったが、公助の部分は関係課と連携を取って案内ができていますが、共助の部分、民間の支援機関が少なく、その力を借りることができず支援が行き詰まるシーンがある。共助への働きかけが必要になると思う。

(会長)

・社会資源の開発も必要であるから、その視点も入れてほしいという意見だったと思う。長期的な視点で可能であればNPOの育成など。

(委員)

・生活している子どもだけを見ていればいい、ではなく、地域に出ていくことが最重要課題。地域のボランティアに子どもたちと参加したり、双葉寮を知ってもらうことからやっている。学童は舞鶴市全域から受け入れ。地域福祉に貢献できるようにとやってきた。被虐待児が増えており、知られてはいけないうちが増えすぎており、地域の祭りや行事に出していくのが難しい。子どもによって地域に出られる、出られないがある。地域から「なんであの子はいないの?」と言われることもある。そんな中で、地域とうまくつながっていく方法を模索している。

(会長)

・外の目をどう入れるかから、次の課題が生まれている状況。共助の部分に但し書きできるとよい。

(委員)

・5期計画のヒアリング結果を見て、悩みが変わっていないと感じた。障害分野は、考え方が変わってきて、地域での生活を大事にしていこうと取り組みが進んでいるが、地域で生活しようとする、と、資源が足りない、高齢の親が抱えてしまっていて、親が倒れてから存在が分かってどうしようというケースが年に数回はある。障害がある方も高齢化、親も高齢化。親の心配は「この子をどうしたらいいか」というもの。50代の障害者を90代の親が見ている。地域に住めるグループホームがない。重度の方が地域で生活する資源がなく、舞鶴市外の施設に入所してもらうなどしている。グループホームは重い知的障害の方を受け入れられない。

・社会のルールを守ることに課題のある方も多数。親と生活して、社会のルールを学ぶ機会がなかった方が一人暮らししようとする、社会性が身につけていないなどトラブルが起こったりする中、どうやって地域の中で生活してもらうか。重層的支援体制整備事業との協力、高齢分野の協力、いろいろなつながりを持ちながら支援している。

・次期計画の中で「支える側・支えられる側を超える」「障害のある〇〇さんではなく、地域の〇〇さん」ととても共感する。障害があり助けてもらっただけじゃなくて、強みを活かした存在意義があるといいと思った。ぜひ推進できるようにしていきたい。

・サロンのところでいうと、高齢者のためのサロン、子供向けのサロンはあるが、ごちゃまぜサロンはない。たとえば高齢の方が子どもをあやす、障害のある方がコーヒーを淹れて、ありがとうと言える場。やってあげているではなく、おたがいさまのサロンがあればいい。

(会長)

・グループホームの問題は、情報収集できていないところが大きな問題。良心的なところばかりじゃない。障害者でなく運営者が地域に入ってきてもらい自覚を持ってもらう視点が組み込まれたらいい。属性を超えたサロン、各地に例があるので情報収集いただければ今後につながると思う。

(委員)

・圏域の中で地域格差が出てきている。山間地域は、人口が少ない地域性で町中にくらべるとコミュニティがしっかりしている。しかし、コミュニティが高齢化とともに崩れていく。支える側が減って、支えられる側が増えている。この人をどのように支える側にするかが難しいと思っている。人材不足によるサービス閉鎖、休止により、「住み慣れた地域で」が、難しくなっている。支え合いボランティアも地域格差がある。山間地はない。暮らしやすい地域と暮らしにくい地域の格差をどう考えて策定していくか。分野連携については日々感じているが、人と人の連携が多すぎて、関係機関の人が変わると一から作り直しという状況がある。

民生委員改選など、一からつなぎ直しでゼロから始めないといけない。各分野の人と人でなく、関係機関と関係機関としてのつながりにできたら続いていくと思う。

(会長)

・地域づくり事業については、福祉のコミュニティを作っていこうというものだったと思うが、人口減少下においては、福祉の地域づくりという視点だけでなく、地域振興まで含めてやっていくという視点が必要で、分けて考えられない段階に来ている。連携、属人的なものになっているという意見については、人選のことばかりでなく、業務もある程度整理して、どういったことをやるのか形としてわかりやすくしていくことが必要。

(委員)

・ボランティア数が急増したのがなぜかという、令和5年に老人クラブの方がまとめて入られたため。そのあとも増え続けた理由は高校生。ボランティアを引き受けたいという気持ちのある高校生がたくさんいる。ちょっとしたイベントを行う際、高校生に声をかけるが、参加が取り合いになるほどであり非常に嬉しい。舞鶴市には大学がないが、高専等もあり、若者世代がこれからの福祉の担い手、ポイントになってくると感じる。

・重層的支援体制整備事業の実施を通じて、これまでより社協と市の関係が密になってきた。市と連携し支えていくという体制が事業を通じてできてきた。

(会長)

・高校生や若い世代の関心が高いのは最近の傾向のよう。よい芽を広げていけたら。市との連携も密になってきたということで、地域福祉活動計画の策定においても連携をお願いしたい。

・本日欠席の迫田委員からお預かりしている意見を事務局からご報告いただきたい。

(事務局)

・迫田委員よりお預かりした意見を報告する。

・1点目は若手と高齢者などの世代間による持続可能な体制作りについて。子ども食堂は、60～80代の元気な高齢者が支えているが、PC作業や補助金申請等の事務は難しく、迫田氏のような若手が後方支援を担い役割分担している。このように、若い世代が後方支援を行うなど役割分担することが持続可能なモデルとして有効。また、地元の高校生がボランティアとして子供食堂の方に参加されているそうで、高齢者は若者からエネルギーをもらいながら、若者は地域に貢献できたという自己効力感を得られるという極めて高い相場効果も生まれていると伺った。

・2つ目に、つながりを持たない層へのアプローチと支え合いの循環について。健康でありながら、自分から繋がる方法がわからない高齢者も多い。社会貢献したい方に対し、公助と連携してアプローチしたり、支える側に回ってもらえることで、支える・支えられる側1:1.4の構図も変わるのでは。

・3点目に、個人情報の壁。子ども食堂は誰でも来れる敷居の低さが強みだが、支援が必要な兆候に気づいても、本人同意なく支援機関につなぐことに難しさを感じる。一方で、過去に社協から食料支援の依頼があったときは、それをきっかけに公式LINEでつながり、さりげない見守りにつなげた成功体験があった。このように、行政等の公助から地域の共助の場を信頼していただき、情報連携できる仕組みがあれば、より確実な支援につなげられるのでは。

・支える側、支えられる側という固定概念を超えて誰もが役割を持てるまちづくりを目指す上で、大変示唆に富むご意見を頂戴しております。ご報告は以上です。

(会長)

・個人情報の問題は難しい部分もあるが、民生委員も悩んでいると思うので視点として組み込めたらと思う。